



木村福成 教授

専門：国際貿易論、開発経済学

(インタビュアー：迫本・長山)

『東アジアに展開されている国際的な生産ネットワーク・経済統合』

Q. 木村先生の専門とされている研究内容はなんですか？

専門は国際貿易論ですが、特に「東アジアに展開されている国際的な生産ネットワーク・経済統合」が私の主要な研究テーマとなっています。ここ20年くらいの間で、国際分業の仕方が産業単位の分業ではなく、より細かく生産工程やタスクまで分かれて分業が行われるようになってきています。特に、東アジア（北東アジアと東南アジア）における製造業の分業が現在一番進んでいます。そのような新しい分業体制から様々なインプリケーションが考えられ、東アジアは新しい経済開発のモデルを作っていると言えます。それについての研究が私の一番大事な仕事となっています。東アジアの経済発展が私の専門の一部ですが、その発展モデルを他の地域にも適用していくことができるのではないかと、ということも考えながら研究しています。同時に、5年半前にジャカルタにできた国際機関ERIA（東アジア・アセアン経済研究センター）のチーフエコノミストとしても活動しており、ほぼ毎週東南アジアへ飛んで行っています。授業もしっかりやっていますよ。(笑) 水・木曜の授業の後は、現場に近い所で活動しています。

(Q) ERIAでは何をなさっていますか？

ERIAはASEANおよびASEAN+6の経済統合をサポートするための政策研究をしている国際機関です。毎年30数本の研究プロジェクトが動いており、様々なテーマを扱っています。私はその機関のチーフエコノミストとして全体を監督し、研究内容のクオリティーコントロールを行っています。

(Q)ゼミ生の研究内容はどのようなものですか？

ゼミ生は私の研究内容に近いことをやってくれるゼミ生もいますし、もう少し一般的なことをやってくれる学生もいます。国際貿易論・開発経済学は結構広い分野なので、例えば四年生の卒業論文のテーマになるとさまざまですね。中には国際貿易論・開発経済学にとらわれずに卒業論文を書いている者もいます。(笑) 三年生が取り組む三田祭論文では、例年、貿易パート・開発パート・中間パート(貿易と開発の中間)に分かれてグループ論文を書いています。

(Q)ゼミでの東南アジアスタディーツアーにはどのような意義がありますか？

開発格差がどの程度あるのかについて、実際に目で見て肌で感じてほしいと思っています。実は現在の生産ネットワークは開発格差を利用することによって生じています。賃金格差や開発格差が国際間生産工程の移転などの要因となっています。それがどのように経済開発に役立っているのかについて、自分たちの目で見てもらいたいと考えています。

『グローバルな環境で大いに活躍できる学生になってほしい』

Q. 木村先生の教育理念を教えてください

現在はグローバル化がものすごいスピードで進んでいて、その中では空間と時間が圧縮されています。昔だったら遠かったものが近くなり、物の変化のスピードも速くなっています。ところがこの現象は世界全体で一様に起きているわけではなく、まだら模様で進んでいる現状があります。ある部分では極端に進んでいて、ある部分では遅れているわけです。そのギャップが様々な悪い副作用を起こすわけですが、逆にそれを使って今までとは違う新しい経済活動ができたりするのです。生産ネットワークとはまさにそういった活動で、まだら模様で世界の開発が進んでいるからこそ生産ネットワークができてくるのです。学生諸君はこれから社会に出ていけば、そういったことがますます身近になってくると思います。グローバル化の良い面と悪い面をしっかりと意識してどのように自分たちが仕事をしていけるのか、どのようにグローバル化を楽しむのか、といったことを考えながら頑張ってもらいたいと考えています。経済学だけでなく、英語やその他の言語を用いてうまくコミュニケーションをとれるようになってほしい。グローバルな環境で大いに活躍できる学生になってほしいと思います。あと、細かいことはあまり言いません。(笑) どんな服着てもいいですよ。遅刻はしないほうが良いですが。(笑)

『学生時代、山登りで鍛えた体を活かして途上国へ!』

Q. 木村先生の学生時代のお話を聞かせてください

学部生の頃はよく授業をサボっていました。(笑) 東大スキー山岳部の主将をやっていて、毎年120日以上山に行っていました。そういう生活については、学生諸君は真似しない方がよいですね。4年の秋に引退してから将来のことを考え出して、山登りで鍛えた体を活かして発展途上国で仕事をするのもいいなあと考えるようになりました。例えば世界銀行で働くなどですね。それをするためには経済学を学ぶ必要があると考えました。学部卒業後は、4年間ほど日本の政府開発援助関係の調査を行っている財団法人に入り、途上国を回っていました。28歳からアメリカのウィスコンシン大学に留学し、初めて経済学を学びました。(笑) そこではよく勉強し、5年でPHDを取りました。初めの頃は数学の問題ばかり解いているだけで経済学の意味がよくわからない状態でした。しかし、経済学を続けていく中で、経済学は世の中の役に立つという可能性を感じていきました。その頃までは大学で学生を教えるなんて思ってもみませんでしたね。

(Q)なぜ教員になろうと思ったのですか？

教育と研究のコンビネーションが大切だと思っています。研究で最先端のことを知っていないと教育はできないですし、逆に学生からの素朴な質問が研究に役に立つこともあります。教育と研究のどちらもできるということはとてもありがたいことだと感じています。

(Q)途上国での衝撃がありましたらお聞かせください

途上国の貧しいという側面はテレビなどを通じてみなさんご存知だと思いますが、その一方で驚かされることは途上国の成長スピードです。ある良いインセンティブを与えられると人間はすごく速く変われるということに衝撃を受けましたね。例えば、タイの工場の話をしめすと、アジア通貨危機(1997, 8)以前はジャストインタイム生産方式ができると到底思えませんでした。その後数年でやってのけてしまうのです。現在、たとえばトヨタの工場では、現地の労働者だけで見事なジャストインタイムを行っています。こうした経験から、人間はものすごく柔軟だと感じます。同じ所に何度も足を運んで、どのように変化しているのか見ることを大切にしています。同じ場所を訪れると想像以上に速いスピードで変わった姿が見えます。そうした変化の速さには毎回感動させられていますね。

『知力・気力・体力・リーダーシップを持った学生』

Q 木村ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

人間大事なのは知力・気力・体力だと思います。特に気力・体力はしっかり頑張るのが大事だと思います。それから、自分の頭で考えることが今の時代大切です。容易に多量の情報が手に入る中で、それを選び分けていく能力ですね。最近の学生はちょっと素直になり過ぎていると感じることがあります。素直は良い事だと思いますが、自分が本当に納得したことだけを信じるようにしないといけません。情報を選別し、自分が拠って立つ情報とそうでない情報を区別してほしい。自分の頭でよく考えて納得したことだけを信じることはとても大事ですし、皆さんにはそのような姿勢を持った学生になってもらいたいです。

知力・気力・体力を持ち、リーダーシップを持った学生に来ていただきたいですね。私の教育サービスを有効に使ってくれる学生を期待しています。

『明るく元気に頑張ってください！！』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

明るく元気に頑張ってください。